

# 高齢者の意思決定における追求者傾向低下に関する要因の検討

角谷 くらら

意思決定とは、複数の選択肢の中から1つ、あるいは複数の選択肢を選ぶことを指すだけでなく、選択にあたって伴う判断や予測、評価といった様々な知的作業を含んだ高度な認知活動と定義される。人の意思決定スタイルに関して、追求者と満足者という分類が存在する。追求者は、期待効用が最大となる選択肢を選び出す最大化の原理をもとに、ありとあらゆる可能性と選択肢を検討して最適な選択を目指す。満足者は、限られた能力や時間の中で、自らが満足できる最低基準を満たす選択肢を選ぶことを目的とし、すべての選択肢や情報を精査することは好まない。先行研究により、高齢者では追求者傾向が低下し、そのことが高齢者の感情的ウェルビーイングや満足度の高さに関連している可能性が示唆されてきたが、現段階ではなぜ高齢者で追求者傾向が低下するのかは明らかになっていない。そこで、本研究では、高齢者の意思決定における追求者傾向低下に関する要因を検討することを目的とした。高齢者の追求者傾向低下には、加齢に伴う認知機能の低下や、未来展望が短くなることに伴う動機づけの変化、経験の大きき分けて3つが影響しているという仮説をもとに、質問紙調査を行った。なお、経験の影響としては、最大化による意思決定における後悔経験と、特定の意思決定領域において蓄積された経験の2つの側面を考えた。本研究では、モノやサービスを購入・利用する場面を想定した質問紙を作成し、モノやサービスを選択する際のこだわりの程度を、日常生活における追求者傾向の指標として測定した。

その結果、若者における追求者傾向は、商品の選択にあたって高いこだわりを持つことと関連が見られていたが、高齢者では、こだわりを持つことと追求者傾向は無相関であることが分かり、高齢者と若者で、追求者傾向の具体的な内容に微妙な違いがあることが示唆された。その上で、高齢者の追求者傾向とこだわりの程度に関連する要因をそれぞれ検討したところ、追求者傾向には、未来展望と後悔経験、実行機能が影響していることが分かった。この結果は、加齢に伴い未来展望が短くなることで、現在の肯定的感情を維持・向上する動機づけが高まり、満足化という意思決定スタイルをとるようになるという、社会情動的選択性理論をもとにした仮説と、加齢に伴う認知機能の低下によって最大化という戦略が困難になるという仮説を支持するものであった。一方、後悔経験が高齢者の追求者傾向に具体的にどのような影響を与えるのかということについては、後悔と追求者の関係性が日本人においては明確ではなく、後悔経験の測定方法も適切ではなかった可能性があるため、さらなる研究が必要である。

商品に対するこだわりについては、男女で異なる要因に関連していることが分かった。女性は、主観的健康状態と商品への関心がこだわりに影響しており、商品への関心には未来展望や商品の購入・利用経験が関連していた。このことから、女性において加齢に伴ってこだわりが強くなるメカニズムとしては、長い人生の中でモノやサービスの購入・利用経験が増えることで商品への関心が高まり、こだわりが強くなるということが考えられ、こだわりが弱くなるメカニズムとしては、加齢に伴って未来展望が短くなることで商品への関心が低くなったり、加齢に伴って主観的健康状態が悪くなったりすることで、商品に対して求める基準が下がるということが考えられる。男性では、後悔がこだわりに影響しており、情報処理速度や商品の購入・利用経験もこだわりの程度に影響している可能性があることが分かった。後悔感情を経験することによって、後悔を繰り返さないためにこだわりをより強く持とうとする動機づけが働くという可能性が考えられるが、このことが、加齢の影響をどのように受けるのかを本研究では明らかにすることができなかった。

今後の展望としては、高齢者における追求者傾向の概念および測定方法を再検討し、日本人における後悔感情と追求者傾向の関係についても研究を深めることが求められる。(臨床死生学・老年行動学)